

「AIは〈社会的なるもの〉を変えるか？」という問いによって、 社会学者は何を問おうとしているのか？

早稲田大学 若林 幹夫

1. 問いの検討

「AIは〈社会的なるもの〉をどう変えるか？」という問いには、情報化社会論や技術社会論が「〇〇技術は〈社会的なるもの〉をどう変えるか？」と問うときとは異なる意図や狙い、あるいは社会学（者）の“不安”のようなものが感じられる。それは、これまで人間が編み出し、開発し、用いてきた諸技術とは異なるものがAIの中に見出されていることと関係している。

AIの普及によって多くの職業が消滅するだろうという予想や、いわゆる“シンギュラリティ”をめぐる議論が典型的に示すように、AIは今後人間と同等かそれ以上の知的能力をもつ存在として、人間の社会に関わってくるのではないかと考えられている。また、AIが人間から独立し、人間には理解できない意思や意図や意味の世界をもつ存在になるのではないかという予想も存在する。そこで予想されているのは、人間と同等あるいはそれを超える能力をもち、人間には理解不可能な部分をもつ、人間以外の“意思や意図をもち意味を理解する存在”が、人間の社会の構成要素として一定の（あるいは強大な）主体的役割を果たすような社会が到来する可能性である。人間とAIが共に主体としてそれ以外の事物や技術と関わる社会、そして主体としてのAIが人間を客体として取り扱う社会が現われるなら、〈社会的なるもの〉はもちろんのこと、社会のしくみも変化するかもしれない。だが、そんな社会の到来についての未来予測をする以前に、この問題に関してはもう少していねいに考えるべきことがある。

2. 技術と人間と社会への問い

AIによる労働の代替の議論に関していえば、人間はすでに長い歴史の中で類似のことに度々出会ってきた。少なくとも科学技術が飛躍的に発展し、普及してきた近代において技術が社会をどう変え、そこで〈社会的なるもの〉がどう変わり、それが生活や社会のあり方をどう変え、社会学がそれにどう対応し、自らを刷新してきたのか（あるいはしなかったのか）を事実として確認し、それについて考察することが、AIと社会について考えるための前提であるはずだ。

AIがこれまでの他の技術と異なるものと見なされる理由は、それが知的能力において人間に対抗し、人間を凌駕する存在になるのではないかと予測され、予感されるからである。そうした予測・予感の背景には、知的な能力とそれにもとづく主体性こそが“生物としてのヒトが社会的・文化的・文明的存在としての人間であること”の中核をなす能力であるとする人間観・文明観・社会観がある。だが、技術と人間と社会について考えるときには、そうした知性中心主義的かつ人間中心的な人間観・文明観・社会観の妥当性もまた問われるべきだろう。これまで人間の社会のあり方を規定し、そこで〈社会的なるもの〉の構成に関わり、それゆえ人間と社会のあり方を変えてきた諸技術に比してAIを特別視するのは、「知的能力こそが人間の本質である」とする知識階級の奢りであるかもしれない。

3. 人間とその社会にとって知能とは何か

AI に関して語られる不安の一つに、AI がなぜそのように考え——だが、答えを出すのかがわからないということがある。だが、そもそも目の前にいる他者が何を、どう考えていて、なぜそのように考えるのかということについても、私たちはつねに「分かっている」わけではない。人間の社会は、「分からない人」や「理解できない人」を、習慣や制度や手続きによって「分かるもの」、「理解できるもの」と見なして、組織したり、関係づけたりするところに成立し、発展してきた。

そもそも人間にとって「知」とは何か、人間の生にとって「知能」は他の能力とどのような関係にあるのかについて、人間自身がよく理解しているとは言えない。AI はメタ意識をもたないと言われるけれど、私たち人間もまた、私たちがそれ (Es) として行っている知覚と情報処理と行動の過程をすべて対象化できているわけでない。そうであるにもかかわらず、私は私の思考や判断をとりあえず信じ (るしかなく)、私以外の他者の思考や判断や言動も、それらを信じたり (だが、その根拠はどこに?)、疑ったり、信じるとも疑うともなく受け止めたり、受け流したりして日々の暮らしを送り、〈社会的なるもの〉を生成し、社会を今あるように成り立たせている。

「知能」ということが私たち人間にとっていまだよくわからないものだとなれば、「人工知能」と称して現在開発され、その実用化や普及が図られているものが、どれくらい本当に「天然知能」と重なり合い、どれくらいそれと違うのかということもまた、よくわからないということになるだろう。そして、そのことがよくわからないまま——いつかわかる日がくるのだろうか?——に人間は、自分たちが「人工知能」であると考えるものを開発し、実用化し、利用しようとしている。そしてそれは、人間と技術の関係においてとりたてて新しいことではない。

4. 開かれる問いと思考の地平

以上のことから言えるのは、AI と社会と社会学に未来についてまっとうに考えるためには、技術や知性 (と呼ばれるもの) と人間や社会との関係について、考えをめぐらせなくてはならないということである。AI と〈社会的なるもの〉をめぐる“不安”が社会学 (者) に示唆するのは、そのような問いと思考の地平なのだと思われる。